

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

参加型開発の問題性と地域住民の多様性：
海を名づけること：
微小地名にみる沿岸資源の利用と野生生物との「共生」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 礼子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000988

第2章 海を名づけること

微小地名にみる沿岸資源の利用と野生生物との「共生」

関 礼子
立教大学社会学部

サンゴ礁や岩礁地帯に名づけられる海の微小地名は、人びとが沿岸資源を利用する際の地図であり、暦であり、資源利用の優先度を示すものとして社会的な意味を持ってきた。資源を利用する人びとの間で共有されてきた微小地名は、口承で長く伝えられてきたものもあれば、比較的歴史が浅いものもある。資源利用のための知識のひとつであるから、利用状況と利用形態に応じて名称が変化し、記録されなければ消えていく名称もある。

本論文は、沿岸資源利用の空間認識の社会性と、「名づけること」の社会的な意味について明らかにする。はじめに、沖縄県平安座島を事例に、微小地名から沿岸資源の利用のありかたを考察する。平安座島が沖縄本島と橋で結ばれ、また石油備蓄基地の立地や埋め立て開発が進むにつれて、平安座島周辺の沿岸での漁は衰退し、微小地名は地域で当たり前になる知識ではなくなってきた。この過程に着目し、微小地名が持つ特徴や社会的な意味を明らかにする。次に、野生生物との共生を試みる北海道えりも岬地区の事例を、ローカルな知識にすぎなかった微小地名の利用という点から論じる。この二つの事例を用いながら、微小地名が示す情報の豊かさと自然との関係について明らかにする。

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1. 海の微小地名とローカルな知 | 3.2 漁業の変化と微小地名 |
| 2. 沖縄県平安座島周辺の海の微小地名とその意味 | 3.3 珊瑚礁の海の資源利用の変化 |
| 2.1 複数の視点から名づけられた海 | 4. 北海道襟裳岬における微小地名の利用 |
| 2.2 情報量の濃淡と利用度 | 4.1 襟裳岬の自然と漁師 |
| 2.3 優先的利用と移ろぐ地名 | 4.2 緑化事業と昆布漁師 |
| 2.4 旧暦・潮見表と魚種・漁法 | 4.3 被害をもたらす野生動物との共存 |
| 2.5 危険回避の海図 | 4.4 被害に対する「いい加減」の効用 |
| 3. 微小地名の時間軸 | 4.5 共有される微小地名と自然観 |
| 3.1 戦後の海の変容と漁業活動 | 5. 微小地名の新たな機能と役割 |

キーワード：地域社会、微小地名、住民と自然との関係性

1. 海の微小地名とローカルな知

地名は利用地名、占有地名、分割地名の3つに大別されるという。柳田國男によれば、地形や狩猟採集に用いられる目印として利用地名があり、それらの土地を利用する個人や団体の名前をつけた占有地名が生まれ、土地所有の複雑化に伴って方位や大小、新旧などを区別する分割地名が増加したという（柳田 1998 (1936)）。地名は自然

を利用し、占有し、その状況を相互に認知しあうための知識であり、歴史であり文化である。市町村合併が古くからの地名を消失させると問題視されたのは、地名の喪失が地域の歴史や文化やアイデンティティの喪失につながるためだった（谷川 1988: 19-58; 谷川 1997）。逆に、アイヌ語に由来する日本語地名にアイヌ語地名を併記する試みが始まったのは¹⁾、アイヌ民族の歴史や文化、アイデンティティをめぐる政治性や権利の高まりと無縁ではなかった。

陸地における地名とは別に、海につけられた地名がある。「地名は海中・海底の有りようを脳裏に引き上げる釣り針のようなもの」（松本 2003a: 315）で、「地名を手がかりとした動的なイメージのふくらみ」（松本 2003a: 321）を持っている。陸地にランドスケープ（landscape: 景観）があるように、海には「Seascape」がある（松本 2003a; 2003b）。Seascape は、「聴覚・触覚・味覚・嗅覚をもふくめた感覚世界全体、しかも一方的に主体が感覚器官を通して意識的に知覚している世界だけではなく、無意識のうちに身にとりこまれてしまっている世界をもふくむものを意図」した概念である（松本 2003b: 101）。

海に生きる人びとに共有された微小地名は、海の地形や生態だけでなく、それがいかに利用・管理されていたかを示す道標である。科学的な生態学的知識（SEK: Scientific Ecological Knowledge）に対比される、伝統的な生態学的知識（TEK: Traditional Ecological Knowledge）を描き出す微小地名は（表 1）、その海が無主物として国が開発したり管理したりする空間である以前に、人びとの環境世界（環世界, Umwelt）として存在していることを示す。それは、今日では海洋保護区（Marine Protect Area）設定や沿岸資源管理をめぐるローカルな人びとの位置づけに大きく関連し、Community Based Management もしくは Community Based Resource Management といった、コミュニティに軸足を置いた沿岸資源管理の持続性と有効性を主張する根拠にもなっている。

民俗学など既存の地名研究のなかでも、海の地名は、そこに生きる人びとの民俗宗教や世界観、伝統的な生態学的知識を刻み込んだものであった。谷川健一は、「海中の微細な地形を区分し命名」するのは、「船を走らせ、網を入れ、釣糸を垂れ、あるいは海中にもぐって仕事するときの必要から生まれたもの」で、「海で生活する海人たちのかず知れぬ営為のあとがそこにしみこんでいる」と述べた（谷川 1988: 12）。Seascape は、こうした海に生きる人びとの身体化された地図を浮き彫りにする概念である。

しかしながら、日本において、海を守る文脈で注目されてきたのは、漁業権者の Seascape というよりはむしろ、漁業権を持たざる者の Seascape であった。「入浜権」²⁾ や「コモンズとしての海」（玉野井 1995）³⁾ の視点は、漁業権を持たざる地域住民の行為を海の入会＝コモンズとして示してきた。こうしたなかでのみ、海の微小

表1 伝統的な生態学的知識と科学的な生態学的知識

伝統的な生態学的知識 (TEK)	科学的な生態学的知識 (SEK)
定性的	定量的
直観的	合理的
全体的でコンテキスト依存的	分析的で還元主義的
倫理的	没価値的
主観的で経験的	客観的で実証的
柔軟性	厳密で固定的
知識の形成に時間がかかる	知識の形成が早く、結論に早く至る
空間的に限定された地域での長期間の変化については詳しい	短期的ではあるが空間的には広大な地域をカバーする
精神論的な説明原理	機械論的な説明原理
環境を対象化したり管理したりしようとはしない	環境を対象化して管理しようとする

出典註：Berkes 1993; 1999; Gunn, Arlooktoo and Kaomayuki 1988; Stevenson 1996 より要約
 出典：大村 (2003: 40)

地名は社会的意味を持つことができた。

しかしながら、ローカルな知が織りなす Seascape には、地域の環境は地域がつくるといふ主体的な営みのなかで、より積極的な意味を持つように思われる。本論文では、はじめに沖縄県平安座島の事例から、海を名づけることと微小地名の社会性について考察する。さらに、漁業権者の Seascape が漁業権を持たざる者の Seascape と重なり、環境保全の文脈で有用な知識に変化している北海道えりも町の事例を論じ、伝統的な生態学的知識をデータとして含んだ微小地名が、失われつつある民俗としてではなく、生きられる民俗として海の環境の保全に果たす機能について考えてみたい。

2. 沖縄県平安座島周辺の海の微小地名とその意味

沖縄本島中部東海岸に面したうるま市に平安座島はある。海中道路によって本島と陸続きになったのは、1971年のことである。これ以前の平安座島は、金武湾と中城湾、そして平安座東海に囲まれ、四囲の海と密接な関係をもっていた。戦前は山原から那覇へ物資を輸送するマラン船の中継基地であり、漁業を主たる生業としてきた。平坦な土地が少なく、痩せた土壌で畑作に不適な条件にある平安座島は、そのぶん海への依存度が高かった。

ウミアッチャー（海を歩く人）と呼ばれてきた平安座の漁民⁴⁾は、伝統的にアナサグイという矛突漁と、アギンナーという網を用いた漁を行ってきた。どちらもイノーの中の内海での漁であった。1926（大正15）年生まれの金武川清吉氏は、昭和10年代から冬にアナサグイ、夏にアギンナーを行い、平安座の四囲の海の119の微小地名

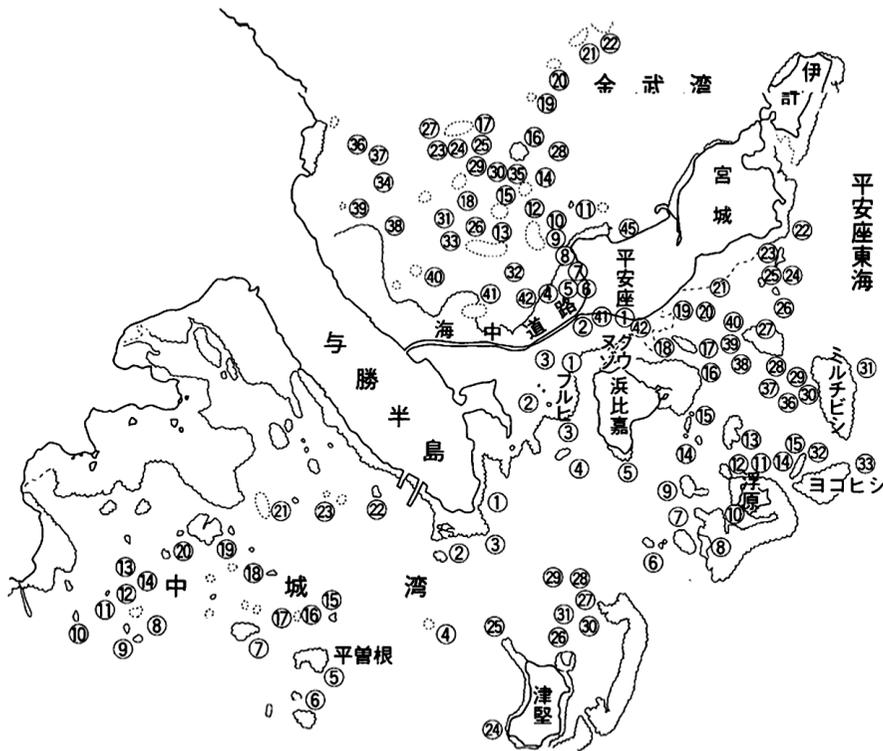


図1 平安座近海の微小地名
 出典註：金武川 (1985: 342) に加筆して作成
 出典：関 (2004: 136)

を記憶していた⁵⁾。119の微小地名は、漁民の身体性に根ざした海図がいかにかに描かれ、いかに変化していくのかを示す、興味深い情報である。図1, 表2を読み解いてみよう。

2.1 複数の視点から名づけられた海

表2でまず着目したいのは、微小地名に陸の地名がついているということである。平安座東海で、「宮城(ハナリ)の水路」を意味するハナリグチは、平安座島から見て宮城島の隣にある水路だという意味である。金武湾に示されるクナグーシは、地理的に平安座島の漁業組合の前にあるため、「クナグー(漁業組合)のシ(瀬)」である。

他方で、金武湾の微小地名に示されるチバナヌサチは平安座島の西端を「知花の先」と呼んでいる。また、その近くにある岩をチバナウフゲーヒ、つまり「知花の大きな岩」と呼んでいる。中城湾のヒッチャヌサチは「平敷屋の先」を意味している。こうした微小地名は、海上での位置を知るために、2点をつないだハジアテ(ヤマアテ)でポイント認識をしてきたことを示すものである。

表2 海・干瀬の微小地名と意味

	微小地名と意味	地名区分				地名と共に想起された事柄、伝統的な生態学的知識など
		I	II	III	IV	
金 武 湾						
1	シヌグゾー：シヌグモーの門口（ゾー）近くの船揚場	○				ここからイザリ，貝拾いに海に出る。
2	ハマヒチトゥガイ：海中道路の付け根付近の尖ったところ（トゥガイ）	○				
3	タカタチチ：高くなった干潟（タカタ）の上（チチ）	○				徒歩で本島まで歩く海の道。
4	トゥマイヌカチ：トゥマイ（泊＝人の姓）の海垣		○			
5	ヒンダトゥガチ：新里（ヒンダトゥ＝人の姓）の海垣		○			
6	イチンヌカチ：伊計（イチン＝人の姓）の海垣		○			
7	ミーガチ：新しい（ミー）海垣			○		
8	チキンジョウガタ：津堅門（チキンジョウ＝人の姓）の土地にあった護岸（ガタ）		○			
9	チバナヌサチ：知花の先（サチ）。平安座島西の尖ったところ	○				かつては一続きだったが現在は岩が点々としている。
10	チバナウフゲーヒ：知花の海中にある大きな岩（ゲーヒ）	○				
11	タカジョウヌスニ：高くなっているソネ（スニ）	○			○	大型船が乗りあがらないように灯台が立っている。
12	チンシビシ：ひざごぞう（チンシ）のように浅い干瀬	○				周囲は水深が深く山のように盛り上がっている。
13	ウーリシ：波がたつ（ウーリ）瀬（シ）	○			○	ここに白波がたつと漁に出られなかった。
14	ナカンシ：中の瀬の意か？			○		
15	カーミシ：ナカンシの南の瀬			○		
16	ニシイシ：北（ニシ）の瀬			○		岩がたくさんある瀬。
17	クナグラーシ：漁業組合（クナグラー）の前の瀬	○	○			
18	ミナガスニグラー：宇堅（ミナガ＝地名）崎から離れたところにあるソネ	○				
19	ウルビシ：サンゴ礁（ウル）の干瀬	○				台風接近時以外にも風があると波がたつ。
20	トゥメービシ：先に発見した（トゥメー）干瀬			○		ウルビシの北の陸側にある。
21	フカストゥメービシ：沖（フカ）にあるトゥメービシ			○		
22	シラハマスニ：海底が白砂のソネ	○				

23	タラーアカヒジイシグワー：赤比地（アカヒジ＝人の姓）の太郎（タラー）の小さな岩	○			マクブやミーバイの棲家で有名だった。
24	ニーブヒラー：禰保（ニーブ＝人の姓）の平たい石	○			マクブなどがとれた。
25	ナーグスクグワークムイ：宮城（ナーグスクグワー＝屋号）の窪地（クムイ）	○			
26	クシハマジョーサーラハー：後浜門（クシハマジョー＝屋号）の魚が見えないのであてずっぽうでモリで突くところ（サーラハー）	○	○		岩の間が暗くて中がよく見えない。
27	アガリハマグワーチブラー：東浜川（人の姓）の頭のような形の岩（チブラー）	○			
28	ウィーザトウスメーイシ：上里（ウィーザト）おじいさん（ウスメー）の石	○			平安座で1979年から自治会長を務めた上里氏の祖父は漁民で、よくここでモリを用いた矛突きをしていた。
29	ムチゲーヒ：チブラー石を大きくしたような岩	○			甲イカがこのサンゴ礁の下に産卵のために集まった。甲イカの巣があった。
30	モーイシハーガヤー：海草（モ）がはえる浅瀬（ハーガヤー）	○			カマスやイカなどがとれた。
31	アシビシタカー：瀬がサンゴで浅く赤く見えるところ	○			甲イカの巣があった。
32	ウフジーシ：おじいさん（ウフジー）の石（シ）	○			
33	ナガシグワー：細長い（ナガシ）ところ	○			
34	ヒツルーガマヒトゥヤー：カマス（ヒツルーガマ）を追い込み網でとるところ	○		○	深みになっており、石がある。
35	ンブーイシグワー：一人身のおじいさん（ンブー）の石	○			
36	ウキンビシ：宇堅（ウキン＝地名）から少し離れた干瀬	○			
37	ウビラハー：カメが浮き上がる（ウビラハー）ところ	○		○	アカウミガメ、アオウミガメがとれた。
38	ウドゥンゲーヒ：ウナギ（ウドゥン）がよくとれる岩があるところ	○		○	
39	グシチャーハーガヤー：具志川（グシチャー）近くの浅瀬	○			
40	ティルマナカイシ：照間近くの浅いソネ	○			
41	シラアーヤナー：屋慶名近くの岩がたくさんある浅瀬	○			
42	クンシグワー：国吉（クンシ＝屋号）の干瀬	○			
43	クープズニ：具志川の昆布（クープ）の沖にあるソネ	○			

44	カービシ：海底から湧き水がでる（カー）ところ	○			水と潮とが見て区別できる。
45	ドゥゲーリマチューカー：マチューカー=人の名前		○		大きな岩があり、旧暦5月4日前後にミーバイが産卵のために集まった。海に潜って、モリで突いた。ミーバイは穴の中にいるので逃げなかった。埋立地の近く。
中 城 湾					
1	カスザチ：ヒツチャヌサチ（平敷屋の先）、カッチンザチ（勝連の先）ともいう	○			
2	ニースヒラジマ：陸側の（ニース）平らな島（ヒラジマ）			○	魚をよくとった場所。
3	フカヌヒラジマ：沖側の（フカヌ）平らな島			○	
4	ファトゥンジ：ヒラジマの沖（ファ）にある岩、トゥンジともいう			○	
5	ヒラスーニ：平瀬	○			津堅島と久高島の間の特クグチから勝連のホワイトビーチにかけての浅瀬。戦後まで潜水艦が入らないように、防潜網がはってあり、昭和30年頃に防潜網をスクラップとして引き上げた。
6	フカヌヒラスーニ：沖の（フカヌ）ヒラスーニ			○	
7	ナーカビシ：ヒラスーニとの間にある瀬			○	
8	イチマンヒシグワー：糸満（イチマン）漁民の瀬		○		
9	カーミズニ：不明	○			大きなサンゴの石があるソネ。
10	ウシバングワーヒシ：丑番（ウシバン=人の姓）の瀬		○		
11	マチハマゲーヒ：松浜（マチハマ=人の姓）の大きな岩		○		干潮時に岩の頭だけみえる。
12	ハンカージョーヌリグワー：波武川門（ハンカージョー=人の姓）の藻（ヌリ）がはえているところ		○	○	旧暦1月から3月に、マクブが産卵のために集まってきて、海草に横たわるようにしていたのをモリで突いた。
13	アバヒスクークムイ：ハリセンボン（アバサー）がたくさんいた池の意か	○		○	
14	メークブタイシグワー：前久保田（メークブタ）の石		○		
15	フカヌキラマビシ：沖側のキラマ（慶良間島の名をとったものか）ビシ	○		○	
16	ニースキラマビシ：陸側のキラマビシ	○		○	タイ、マクブ、カマス、ヨツバリ、エイなどがいた。
17	ジャンヌンプスケーヒ：謝名（ジャンヌ=人の姓）のおじいさん（ンプスー）の岩		○		
18	マジンビシ：不明				追い込み漁をした干瀬。
19	アカビシ：赤く見える干瀬	○			

20	グデイトゥヤーワチ：点々模様の魚（クデイ）がとれる狭く深くなった脇（ワチ）	○		○	
21	ナゴージ：不明				チブラー石がたくさんある干瀬。
22	ヒッチャアカー：平敷屋（ヒッチャ＝地名）のサンゴ礁の干瀬	○			
23	ヘンナアカー：平安名（ヘンナ＝地名）のサンゴ礁の干瀬	○			
24	ナガウルー：細長い（ナガ）サンゴ礁（ウルー）	○			
25	ニツイシ：津堅にある二つの石があるところ	○			タッチイシともいう。
26	ギニングワー：不明				ニースギニングワーともいう、津堅ではアフアグワーという。
27	フカヌギニングワー：沖側のギニングワー			○	
28	チキンウーリヤー：津堅（チキン）の白波がたつところ（ウーリヤー）	○		○	
29	チリマントゥヤー：チリマンをとる（トゥヤー）ところ	○		○	
30	フカグムイグワー：沖の深い池になっているところ	○			
31	ナカンズ：中の溝			○	細長い溝になっており、12月から1月、3月から4月頃にマクブが産卵する。
32	オーフニハーガラハー：大型船（オーフニ）が座礁する（ハーガラハー）岩	○		○	
平 安 座 東 海					
1	ブルヒ：不明				追い込み漁をしたりタコを取った水深の浅い場所。
2	カササイシ：クバ笠の形をした石	○			
3	アビヤージ：追い込み漁をして大きな声で叫ぶ（アビヤー）ところ	○		○	カササイシやブルヒの近く。
4	イェービシ：不明			○	台風が接近すると大波がたち、瀬が盛り上がって真っ白に見える浅い干瀬。
5	カマンタビシ：エイ（カマンタ）に似た大きな三角の石が水面から上に出ている干瀬	○			この近くに馬のたてがみに似た石があり、これをウマヌカンジューといった。
6	ワカリビシ：瀬が離れて分かれている（ワカリ）ところ	○			追い込み漁や矛突きをした。
7	シーグチ：瀬と瀬の間の水路（クチ）	○			ゾーは浅いが、クチは大型船が入り出できる深いところを指す。

8	ウチバルグワー：小さな浮原島	○			ウチバルグワーとウチバルとの間をウチバルタナカといい、このあたりには甲イカの巣がたくさんあった。ウチバルグワーのサンゴ礁には、アダニグチャー（アダンの実のような形）、パチパチャー（肌に触れると痛みを感じる、針のように細い珊瑚礁）、ウシヌチャー（牛の乳のように細長い形）、ミーミーグイ（耳のように薄く、バラの花のような形）などの名前がついていた。
9	マガイビシ：不明				旧暦3月の大潮の場合には瀬が浮き上がって見える。甲イカの巣があり、よく捕りに行った。
10	ウチバル：大きな浮原島	○			戦前・戦後に糸満漁民がここを拠点にトビイカの沖釣りに行った。ヒータティ（火を立てる）と呼ばれる石積み灯台があり、薪を燃やした明かりを目標に舟が出入りした。平安座の人も沖から戻るときにはヒータティを目標にした。ヒータティが見えないときには、北極星を目当てにした。
11	ウチバルツジノー：ウチバルの岩が浮き出たところ	○			周辺で魚をとる。
12	フカデーヒ：沖の岩（デーヒ）が立っているところ	○			周辺は追い込み漁の漁場であった。
13	モーシグワー：浅く、海草（モー）がよく生えるところ	○			ソネになっている。魚が寄り付く。
14	ニーデーヒ：根（ニー）の岩	○			離れた岩のあるところ。
15	ミーフガー：女岩、穴の空いた岩	○			ふたつの岩をくつつけたようなところで、その間に穴が開いている。
16	ヒジャツジノー：比嘉の岩が突き出たところ	○			比嘉集落の人は、ハーリーの時には、ヒジャツジノーの周りを回った。
17	アカムルビシ：全体が赤っぽい干瀬	○			以前は珊瑚礁があったところ。戦後10年か20年くらいは、ジュゴンがこの辺りを泳いでいるのをよく見ることができた。ナンザからアカムルビシの北のタマターにかけて生えているザンクサを食べていたようだ。
18	ヨクテヤー：横たわるところ	○	○		珊瑚礁が横になっているところ水路を横切るヨクテヤーに船を引っ掛けないように注意して通った。
19	ナンザ：不明				旧暦3月3日にナンザモーイが行われる。
20	アタクイシ：海鵜（アタク）がとまる石	○			
21	タマター：二つ股になっている	○			桃原の東にある岩で、ふたつ並んでみえるところ。追い込み漁で白イカ、サヨリ、雑魚などをとった。
22	ヤマダキ：山の竹が鳴るの意か	○	○		宮城島の東に位置し、台風が近づくとこの瀬が波の荒れてゴングンと唸る。2、3日前から唸りが聞こえる。また、海藻が浮いて流れる。ペラやタイなどがとれる。追い込み漁の漁場。
23	ハナリグチ：宮城（ハナリ＝地名）の水路（グチ）	○			ここは天気が良くても潮の流れがゆるいときでないと漁ができなかった。
24	ヤハラグチ：柔らかい水路	○	○		ヤハラグミともいう。大潮の旧暦15日頃に追い込み漁で網をいれる。夕方、浅いところに舟を用意し、暗くなったら最大満潮で網を入れる。これをユウゲンといった。タマンなどがとれた。

25	チンボーラーグムイ：チンボーラ（タカセガイなどの貝）の形をしている池（グムイ）	○	○	旧暦14日、15日早朝の満潮時に追い込み網をいれたところ。これをアカツチワカヒ（アカツチ＝暁、ワカヒ＝網を入れる）といった。タマン、ベラ、チヌマンなどがとれた。
26	クブヒミグムイ：甲イカ（クブヒミ）の池	○	○	サンゴ礁の小さなグムイで甲イカの巣があった。
27	ハーラビシ：川のような干瀬	○		ナンザ北側にある水路で、マーラン舟が通っていた干瀬。この瀬の先にマーラン舟が停泊するナガリグムイがあった。
28	ハーラトゥガイ：ハーラビシの先の尖ったところ	○	○	波がたつ場所。
29	ウフグチ：大きな水路	○		
30	ンジャゲーヒ：大潮のときは大きな岩（ゲーヒ）が水面上がってくる（ンジャ）ところ	○	○	クリ舟が引かかるくらい浅く、戦後に大型船に乗っている一等船員が小型の舟をこの岩にのりあげたことがある。
31	ミルチビシ：不明	○	○	深くなっており、ここにひどく波がたったら沖が荒れてくる。
32	ウチウルビシ：浮くようなサンゴの干瀬	○		マクブ、タマン、ミーバイ、雑魚がとれるところ。
33	クシウチウルビシ：後ろの（クシ）ウチウルビシ		○	
34	ウチウルグチ：ウチウルビシのところにある水路	○		舟は通らず、漁場として利用していた。
35	カナータナバルチブラー：棚原（カナータナバル＝屋号）のサンゴ礁の丸い石		○	矛突きでミーバイ、アカジンなどの魚をとっていた。
36	イシチャーチブラー：石川（イシチャー＝屋号）のチブラー石		○	矛突きでアカジンとチヌマンがとれた。
37	トーマイシグワー：當間（トーマ＝屋号）の石		○	追い込み漁ではこの石のところに魚を集めた（石に「アナシテする」）。
38	クシナカムライシグワー：後中村（屋号）の石		○	
39	ナカメジョーイシグワー：中前門（ナカメジョー＝屋号）の石		○	
40	ナンゲーヒ：不明			石があるところ。
41	カチグワースチビ：海垣の後ろ側にある尻の形の石	○		以前、ハーリーは公民館の東側からカチグワースチビまでのコースを往復した。
42	フカガシチ：不明	○		ナンザの手前でカササ石があった。波武川（人の姓）の舟置き場になっていた。現在は埋め立てられてない。

注：Ⅰ地形・地名など、Ⅱ利用者名など、Ⅲ方位・大小などで地名を区分した。そのうち、漁業資源・漁法・リスク回避などを意味する地名をⅣで示した。なお、インフォーマントの説明を重視したため、地名の意味には民俗語彙とは異なるものがある

だが、平安座の漁民が、平安座島の西端やその付近の岩を「知花」という冠をつけて名づけるのは不自然である。チバナヌサチやチバナウフゲーヒ、ヒツチャヌサキといった微小地名は、平安座島の漁民とは別の視点からつけられたもの、他のシマ（他集落）の漁民が用いたものだと推測できる。ひとつの場所が複数のシマの視点から

名づけられるものであるならば、表2にみる海の微小地名は、海を利用する複数のシマの Seascape が織りなした海図といえるだろう。

2.2 情報量の濃淡と利用度

広範囲の地名を知っているということは、広範囲の海で活動してきたということの意味する。ひとりの漁民の活動領域が広がって、他シマの漁民からの微小地名が知識として加わっていく過程は、後述する海の資源利用の変化と関係している。

ただし、金武川氏の情報は広範囲を網羅するが、金武湾、中城湾と平安座東海とで濃淡があった。ある特定の場所は生き生きと語られ、別の場所については、つまらなそうに語られた。

彼の平安座東海の情報量は圧倒的である。たとえば、ウチバルグワーと呼ばれる「小さな浮原島」には、クブシムヌヤーがたくさんあったという。クブシムヌヤーとは、産卵期にクブシミ（甲イカ）が集まり、産卵した場所が巣（ヤー）のようにみえる場所のことである。ウチバルグワーの海中には、さらに細かく、アダンの実のようなアダグチャー、細長い牛の乳のようなウシヌチー、耳のように薄いミーミーグイ、触れると肌に痛みがあるパチパチーというように、特徴的なサンゴの形に名前がつけられていた。

こうした情報密度の濃い場所は、彼が頻繁に潜って矛突き漁を行った場所であった。逆に、情報密度の薄い場所は、利用度が低い場所であった。

2.3 優先的利用と移ろぐ地名

出漁できる日数は天候に左右され、出漁できる時間も限定される。アナサグイという矛突き漁は、自らが魚と知恵比べ・根比べするような身体性の強い活動である。漁のポイントは、移動時間が短く、確実な水揚げが可能な場所が選定されることが好ましいため、必ずしも、広範な海を知らなくて良い。

特定の個人が頻繁に働きかける場所には、人名がついていることが多く、カチ（海垣。石を積んでつくる海の工作物＝漁の仕掛け）のように壊れたら修復するという管理が伴っている場合と、繰り返し潜る＝働きかけることがその場所の優先的利用を認知させる場合とがある。後者の場合、その場所は特定漁民の「とっておきの場所」であり、頻繁に資源にアクセスしても一定の水揚げが期待しうる良好な漁場である。そして、通常、人名を冠にした漁場は、その人に漁場使用の優先権があることを示す。

ハンカージョーヌリグワーはそうしたポイントのひとつである。ハンカージョーとは、金武川氏より一世代上のタコ漁を専門に行っていた漁民（故人）の屋号「波武川門」である。中城湾、なかでも泡瀬の海には、ハンカージョーの冠を付した石がいくつかあり、そのひとつが金武川氏に記憶されたハンカージョーヌリグワーであった。

微小地名のなかには、ハンカージョーヌリグワーのように、亡くなくても引き続き名前が残るものがある。金武湾のドウゲーリマチェーカーという地名もその例で、もはやマチェーカーが誰かを特定できない。他方で、泡瀬のハンカージョーの名がついていたという石のように、忘れられた地名もある。海の微小地名は移ろぐ地名でもあるのだ。

2.4 旧暦・潮見表と魚種・漁法

旧暦のカレンダーと旧暦からはじき出される潮見表にあわせて、漁場と漁法は変わる。微小地名には、クブシミやミーバイの産卵期など、水揚げされる魚種と季節の情報とともに想起される地名がある。たとえば、平安座東海のタマターは追い込み漁で白イカやサヨリをとった場所であり、ヤハラグチやチンポーラグムイは大潮の時期に網を入れる場所である。

魚種が冠になっている地名もある。クブシミ（クブヒミ）が冠としてつく平安座東海のクブヒミグムイの他、金武湾ではカマス（ヒツルーガマ）をとるヒツルーガマヒトウヤーやウナギ（ウドウン）がとれるウドウンゲーヒ、中城湾ではクディをとるグディトウヤワチー、チリマンをとるチリマントウヤー等である。これらもまた、それぞれの魚種がとれる季節を名称に含んでいる、「旬な」微小地名である。

2.5 危険回避の海図

また、微小地名のなかには、漁業だけでなくマーラン船の航海にとっても重要な気象図や海図を描くものがある。シ（瀬）に立つ波の白さで出漁の可否を判断するウーリシやウルビシ（金武湾）、台風の接近を知らせるイエービシやヤマダキ（平安座東海）。水路を横切るサンゴ礁に座礁しないよう注意を促すヨクテーヤヤ、大潮の時期には大きな岩が浮かび上がってくると注意を促すンジャゲーヒ（平安座東海）などである。こうした微小地名は、危険回避のための情報を組み込んでいる。

3. 微小地名の時間軸

金武川氏が記憶する海の微小地名は、広範囲にわたって、伝統的な生態学的知識や海底の地形図、資源利用のための社会図を描いていた。漁民たちは、陸＝シマの視点から海を名づけ、漁場の優先権を相互認識するために海を名づけ、海の地形や主たる魚種を示すために名づけ、安全な出漁と航路を教え説くために名づける。

細やかに海を利用するために、海の微小地名は頻繁に書き換えられてきたに違いない。泡瀬でハンカージョーの名がついた複数の石が特定できなくなったように、時の移り変わりに伴って忘れ去られる微小地名がある。逆に、平安座に漁業組合ができて

から生まれたクナグーシのように、比較的新しく生まれた地名もある。微小地名は人びとの利用状況に応じて変化する、動的なものであったに違いない。そうだとしたら、金武川氏の記憶する微小地名は、金武川氏の人生の時間軸が切り取った Seascape を示すものといえよう。

3.1 戦後の海の変容と漁業活動

金武川氏の記憶が広範な海域をカバーしているのは、彼の人生が平安座の海の変動の時期と重なっていたことに因っている。

アナサグイやアギンナーといった伝統的な漁法で営まれた平安座の漁業は、戦後に大きく変化した。終戦直後にはダイナマイト漁が行われ、1950年から1957年にかけてのスクラップブームの時期には沖縄戦で沈んだ戦闘機などの引き上げ作業が行われた。米軍基地での工事や労務などの「軍作業」に従事する人も出てきた。

金武川氏もまた、この変動の海を生きた。スクラップブームの際には戦闘機を引き上げ、米軍基地の工事にも従事した。より条件の良い仕事があるときには漁をやめ、仕事がなくなると漁に戻った。

「離島苦」が意識されるのはこの時期である。干潮時には歩いて渡れる沖縄本島までの距離が、悪天候になると限りなく遠く、通勤も通学もできない。急病人にも対応できない。マーラン船の中継基地であった平安座は、海運から陸運へと交通の主力が変化するに従い、交通不便な沖縄本島周辺離島として、地理的にも経済的にも条件不利地になったと認識された。

「離島苦」解消のために、1958年から沖縄本島と平安座島とを結ぶ海中道路建設のために島民の資金積み立てが始まった。1961年に「平安座海中道路建設期成会」を結成し、資金と労力を島民が負担する形で海中道路建設に着手した。だが、うまくいかない。建設が頓挫しつつあった1971年に、平安座は海中道路建設を条件にガルフ社（後の沖縄石油精製）の進出を受け入れ、「離島苦」を解消した。また、1973年からは平安座島—宮城島間の埋立が開始され、CTS（石油貯蔵基地）が建設された⁶⁾。

金武川氏はCTS建設工事に従事し、その後は平安座島内にある石油基地関連の企業で働いて定年を迎えた。時代の波を泳ぐように、さまざまな仕事を経験してきた金武川氏であるが、海を離れたわけではなかった。現金稼ぎになる仕事の切れ目をつないだのは海での漁であり、退職後のアイデンティティはあくまで「漁民」だった。高齢になっても、網やサバニさえあれば漁ができると、海に通った。

3.2 漁業の変化と微小地名

他シマの漁民が名づけた微小地名を覚え、他の漁民が優先的に潜るポイントを「遠慮」して避け、あるいはその人の名が刻まれた漁場に敬意を払う。天候を読み、海の

地形を読んで安全に漁を営む。金武川氏が記憶する微小地名は、平安座の四囲の海を網羅する。それは直接にその場に行き、見て、あるいは潜り、誰かから教えられて継承される知識である。119の微小地名は、彼がアナサグイやアギンナー、スクラップ引き上げ作業や軍作業など、さまざまな活動を経験し、多くの人と情報交換することで獲得された知識である。

金武川氏が自負していたように、これほど多くの微小地名を知る人は他にいない。漁業の軸は、既にモズク養殖とパヤオ漁に変化している。人名を冠にした微小地名が示すのは、過去の漁業活動における人と人との関係性(社会性)となった。伝統的な漁法や内海での漁の衰退は、微小地名が指示する意味を減じてしまっている。119の微小地名は、金武川氏の人生に重なる時代に生きていた情報であり、記録されることにより、消えることも更新されることもなく凍結され、保存された情報になったのである⁷⁾。

凍結され、保存された微小地名は、変化する時代の一断面を切り取った海と人と関係誌を描いている。漁民の活動の主力は、既にモズク養殖や沖でのパヤオ漁へと変化している。アナサグイやアギンナーといった、珊瑚礁に抱かれた内海での漁が育んだ微小地名は、モズク養殖やパヤオ漁とは切れた知識になってしまっている。航路の浚渫やGPSの導入は、危険回避のための微小地名の役割を小さくしてきた。

3.3 珊瑚礁の海の資源利用の変化

戦後の金武川氏の「漁民」としての人生のなかで、漁業は不安定雇用の合間をつなぎ、定年後の生活を支えるものだった。先行投資が必要で、新規参入や撤退が簡単にはできないモズク養殖やパヤオ漁とは異なり、伝統的漁法による内海での漁は「生計安定化戦略」としての機能を有していた(関 2004: 148)。

そこで展開されていたのは、生きるための業(=なりわい)としての漁撈的な漁業であり、職業としての漁業からは遠いかもしれない。とはいえ、内海で細々と営まれる漁は、少数の人びとにとっては重要な活動であり続けている。ある人にとって、それはマイナー・サブシステム⁸⁾として「楽しみ」の要素が強いものになっている。またある人にとっては、ささやかな現金収入を得るための「密やかな営み」になっている。

平安座島の隣にある宮城島で出会ったある人の漁は、後者のケースである。まだ日の高い時間に、モリで魚をとる名人と聞いて案内された家では、数人の仲間が集まって酒盛りの最中だった。働き盛りの年齢だが定職を持たず、一人暮らしの家は、しばしば仲間同士の「社交場」になるのだという。これを「無職で昼間から仲間と酒盛りしている」と表現すると、沖縄の高い失業率が問題として浮かび上がるのだが、ここで聞いたのは、異なる解釈であった。

つまり、自分たちは本州に「出稼ぎ」に出て戻ってきた。沖縄の人は都会で職を失い、お金がなくなっても、旅費ぶんは残して沖縄に戻ってくる。生まれシマに戻ればたとえ職がなくとも暮らしていける。他所の人は自分の故郷に戻らず路上生活者になることも多いが、自分たちには沖縄に帰るという選択肢があった。沖縄で職につけなくても、先祖の位牌（トートーメ）を守るために住む家屋敷があり、漁をして自分の生活を維持できる環境がある、という肯定的な解釈が聞かれたのだった。

内海での漁が衰退するなかで、少数の人びとが伝統的な漁法で漁を営んでいる。専業の漁業者と空間的に棲み分けされた内海での漁では、他者と競合することもない。内海は、資源の獲得を競う漁業者のサイドから離れ、誰もが比較的自由にアクセスできる、ゆるやかに共同利用される「コモンズとしての海」のサイドに寄りつつある。漁民の日常の営み——自然を利用し、占有し、相互に認知しあうこと——に重きがあった微小地名の役割は減少しつつあるのだ。

4. 北海道襟裳岬における微小地名の利用

地域づくりや環境ガバナンス、景観というアイデンティティの創造など、近年、ローカルな視点は地域の自然環境を考えるうえで重要かつ必須のものだといえよう。では、ローカルな知の集積である微小地名は、海の自然環境を考えるうえでヒントになるのだろうか。この問いは、微小地名に内包される伝統的な生態学的知識、資源利用のルールや社会性などをひっくるめて、ローカルな知識がローカルを超えて共有され、自然や環境の保全という文脈で利用しうるものか否かという点にかかわってくる。

北海道の東南端に位置するえりも町には、微小地名が漁業を主体とする集落の内部だけでなく、「よそ者」(鬼頭:1996)にも共有され⁹⁾、現実に利用されている例がある。日高山脈が断崖となって太平洋に沈み込む襟裳岬¹⁰⁾から約2キロメートルに渡って続く岩礁地帯には、ローソク岩(ろうそくの形の岩)、シノビ岩(トツカリ=アザラシを捕るために忍んでいる岩)、ポロイソ(ポロポロと崩れる磯)、ナガイソ(長く横たわっている磯)など、それぞれに名前がある。こうした微小地名は、岩礁地帯に生息するゼニガタアザラシのセンサス調査(個体数調査)のなかで、用いられている。この微小地名のセンサス調査利用が意味するものは何か。少し遠回りになるが、えりも岬地区での自然環境をめぐる「物語」を紐解きながら論じたい¹¹⁾。

4.1 襟裳岬の自然と漁師

北海道えりも町のえりも岬地区は、開拓に伴う森林伐採や綿羊の放牧、蝗害、そして岬に吹く強風によって生まれた「えりも砂漠」の緑化に成功した地域である。サケ・マスの定置網漁が営まれ、豊かな漁場からはタコ、スケトウダラ、カレイ、ハタハタ、

シシャモなど多種多様な魚種が水揚げされている。

しかし、主力はあくまで昆布漁で、「ここは昆布がなければ住むところではない」¹²⁾と言われるくらい、昆布中心で回っている地域である。昆布漁を営む者は、自らを「漁師」¹³⁾ではなく「昆布漁師」と呼ぶ。採取される昆布は「日高昆布」の名で流通しており、「利尻昆布」「羅臼昆布」といった他の北海道の代表的な昆布と比べても格段に知名度が高い。ただし、一口に日高昆布といっても等級によって値段は大きく異なる¹⁴⁾。えりも町漁業協同組合が扱う昆布は品質が良い高級品を主力としており、地元ブランドとして「えりも岬産昆布」を売り出している。えりも漁業協同組合 HP の「直産市場」¹⁵⁾は、「えりも岬産昆布」について「緑化事業で蘇ったえりも岬の海の恵みをいっぱい吸収して、美味しい昆布に育つ」と説明する。

では、えりも岬の昆布と豊かな漁場を蘇らせた「緑化事業」とはどのようなものだったのか。

4.2 緑化事業と昆布漁師

えりも町は強風の町である。襟裳岬の後背地の森林が燃料のために伐採され、開拓され、綿羊の放牧等が行われるにつれ、土地は荒廃した。えりも町の強風は、森林どころか草地も後退させた。一面に赤土の吹き荒れる「えりも砂漠」が出現し、飛砂は沿岸海域をも荒廃させた。昆布の等級は落ち、沿岸の水産資源も減少した。影響は漁業不振にとどまらず、衛生面の悪化や日常生活の機能不全、人口流出や後継者不足など、えりも岬地区の生活全般に及んだ。

この砂漠の緑化が始まるのは1953年のことである。「えりも治山事業所」（浦河営林署）が開設され、本格的に緑化作業が着手された¹⁶⁾。漁師が緑化作業を担う形で行われた事業は、当初は強風に阻まれて成果があがらなかった。軌道にのるのは、在地のローカルな知恵をヒントに、実播後に草の種が飛ばないように雑海草で被覆する「えりも式緑化工法」が生み出されてからのことである。この工法によって、禿山の緑化がすすみ、飛砂で赤茶けていた海が青く再生した。そして海の再生は、図2のように、魚介類水揚げ高の飛躍的な上昇という目にみえる形で示されたのである。

緑化事業は、1992（平成4）年の「えりも岬国有林緑化事業40周年記念」を契機に、全国的にも注目を浴びた。それは、「『エコロジー』という思想が、まだ社会的に認識されていなかった時代に始まり、その重要性を誰もが意識し始めた時代に成功を宣言した画期的な事業」であり、「人間と環境の新たな関係を模索した先駆的な事業」とされた（えりも岬国有林緑化事業40周年記念'92緑と魚のフェスティバル実行委員会1992）。

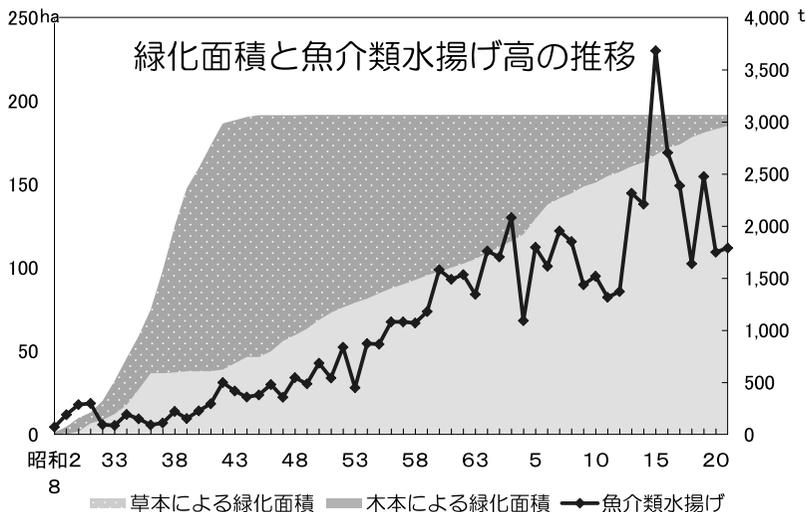


図2 緑化面積と魚介類水揚げ高の推移
出典：北海道森林管理局日高南部森林管理局より入手の資料

4.3 被害をもたらす野生動物との共存

砂漠に緑が戻り、海に良質の昆布が育ち、魚が戻った。それに従い、ゼニガタアザラシの個体数も増加した。もともと、えりも岬地区の人びとにとって、ゼニガタアザラシは珍しい動物ではなかった。地元で「トツカリ」と呼ばれるゼニガタアザラシは、以前から襟裳岬に生息しており、冬には捕獲されて食用に供されてもいた。アザラシが獲れると、アザラシの味噌鍋に欠かせない豆腐が集落からなくなったというくらい、楽しい食材でもあった（えりも昔語りを記録する会 2007: 96）。

ゼニガタアザラシの狩猟や捕獲は、既述のように、襟裳岬の微小地名にも書き込まれている。シノビ岩は、アザラシ猟の際に身を隠す岩を示しているし、トツカリクキドはアザラシが通る水路を意味している。微小地名には、ゼニガタアザラシと人びととの関係が書き込まれていた。

1973年、北海道でゼニガタアザラシの調査を行っていた哺乳類グループ海獣談話会が生息数の減少を指摘した。同年からゼニガタアザラシの個体数調査（センサス調査）が行われ、「ゼニガタアザラシを天然記念物に」という動きも出てきた。だが、天然記念物に指定されると、従来の捕獲・利用という行為が途切れてしまうばかりか、個体数が増加して漁業被害が深刻になりかねない。襟裳岬の漁師たちは、一方的にゼニガタアザラシを保護する意見に反感を抱いた。

この緊張関係を解きほぐす糸になったのが、保護戦略の転換である。強風の襟裳岬にテントを張ってセンサス調査していた学生調査員を、調査が保護一辺倒に用いられることになるのではないかと警戒を抱きつつも、漁師たちは昆布小屋に招き入れて協

力してくれた。そうした漁師たちとの関係が、外部からの一面的な「保護」の視点を、漁業被害をも含めたゼニガタアザラシとの「共生」を考える視点へと変化させた。

1982年に帯広畜産大学の学生らが結成したゼニガタアザラシ研究グループ（「ゼニ研」と略称）は、「保護」から「共生」への路線転換を記すものだった。研究グループ結成前後の数人の学生は卒業後にえりも町の住民になり¹⁷⁾、1990年、ゼニガタアザラシとの「共生」を考えるために、えりも岬地区の漁師や観光業者らと、「えりもシールクラブ」を結成した。

4.4 被害に対する「いい加減」の効用

「えりもシールクラブ」の石川昭会長は、実際にゼニガタアザラシの被害を間近に見てきた漁師である。この会は、被害を置き去りにする保護のロジックを拒み、岩礁地帯がゼニガタアザラシの生息地であり続けてきた理由を、野生生物との共存のためのロジックへと転換した。「絶滅させようとすればできたのに、そうしなかったことが、ゼニガタアザラシと共存の形である」と捉えたのである。

漁業被害を含めてゼニガタアザラシとの共存を考えようとした「えりもシールクラブ」であるが、ここでの被害はかなりの程度、主観に左右される被害でもあった。被害は安定してサケがとれている時はさほど問題にならず、水揚が少なくなると、感情的にも経済的にも大きく浮かび上がってくるものだった。だからといって、豊漁の時に被害がなかったわけではない。被害があっても、「儲けがあるからいいべさ」という感覚があった。

「えりもシールクラブ」では、「漁師はいい加減なものだ。サケの稚魚の放流だって、戻ってくるのは僅かなもの。また、人間も豊かなんだ。食うぶんだけとればいいと思っている」と聞き¹⁸⁾、えりも漁業組合では「ゼニガタアザラシは自然環境だが、増えすぎて人間環境を侵している。とはいえ、ここには自然があるから、ゼニガタがいるんだ」と聞いた¹⁹⁾。

ここにあるのは、「野生生物だから保護しなくてはならない」という、イデオロギー的な道徳ではない。被害がひどく感じられなければ「いい加減（=いい塩梅）」にゼニガタアザラシを気にすることなく、「適当に（=柔軟にバランスをとって）」付き合い合ってきたという事実である。そして、漁師たちは、被害が大きくゼニガタアザラシ憎しになったときにも、ゼニガタアザラシが同じ海に依存して生きているという意識を持っていた。ゼニガタアザラシを害獣に固定することなく、そこにいるべき存在として許容してきたのは、被害に対する「いい加減」の効用といえる。共に生きるという道徳が、そこにはある。

4.5 共有される微小地名と自然観

定置網に従事する漁師は、同時に昆布漁師であることが多い。昆布漁が終わってから、定置網が始まるからである。

昆布漁師は岩礁地帯の微小地名を細かく知っている（表3）。昆布漁がはじまると、「どこ行ってきた?」「カマノセキサ」というように情報交換し、次の出漁時にどこで昆布を採るか考える。他所から昆布漁師の家に嫁いだ人も、海草採集をしながら岩礁地帯の名前を覚えた。岩礁では、フノリやギンナンソウ、マツモやイワノリ²⁰⁾の採集が行われる。漁船に乗って、採集地点にあがるときに、「あっち上がれ、こっち上がれ」と微小地名で指示されるので、自然に覚えるのである。

えりも岬地区の漁師は、しばしば「岩には名前がついている」と語る。微小地名というローカルな知がローカルを超えた意味を持つことを、既に漁師たちは知っている。襟裳岬にある民宿「みさき荘」の経営者は、昆布漁師でもあり、えりもシールクラブのメンバーでもある。民宿の食堂に据え付けられた望遠鏡はゼニガタアザラシのいる岩礁を向いており、「実は岩には名前がついている」と教えてくれた。さらに、ロー

表3 えりも岬の岩礁地帯の微小地名

クキド（水路）	オカノクキド	小さな船が横切ることができる。
	ナカノクキド	中くらいの船が横切ることができる。
	オキノクキド	10トン以上の船が横切ることができる。
	トッカリクキド	トッカリが通る水路。トッカリがあがるのはトッカリクキドから沖である。
セキ（小船で通り抜けられる場所、関）	ポロイソノセキ	ポロイソの沖にあるセキ。
	カマイソノセキ	カマノクキドとも言う。カマの近くにある。
過去に事故があった場所	アベコロバシ	襟裳岬のすぐ近く。
	カンメンマル	オキノクキドとトッカリクキドの間。
	ビクトリア	岩礁地帯の沖。
イソ	ナカノタテイソ	タテイソまたはナカノクキドノタテイソ。
	ナガイソ	長く横たわっているイソ。
	ポロイソ	ポロポロと崩れるイソ。水かぶりの岩。
	カンバライソ	カンバラ。
イワ（岩）	シノビイワ	トッカリ狐のときに忍んでいる岩。トッカリクキドの近く。
	ローソクイワ	ローソクの形をした岩。襟裳岬のすぐ近くにある。
その他	カマ	中が碗のような形状になっている。
	オキシマ	カンバライソの沖にある島
	コジマ	カンバライソの沖にある島。
	ヒラバン	平らなイソ

注：昆布漁師の小金昭一氏による微小地名の知識の一部である

<岩礁の名称>

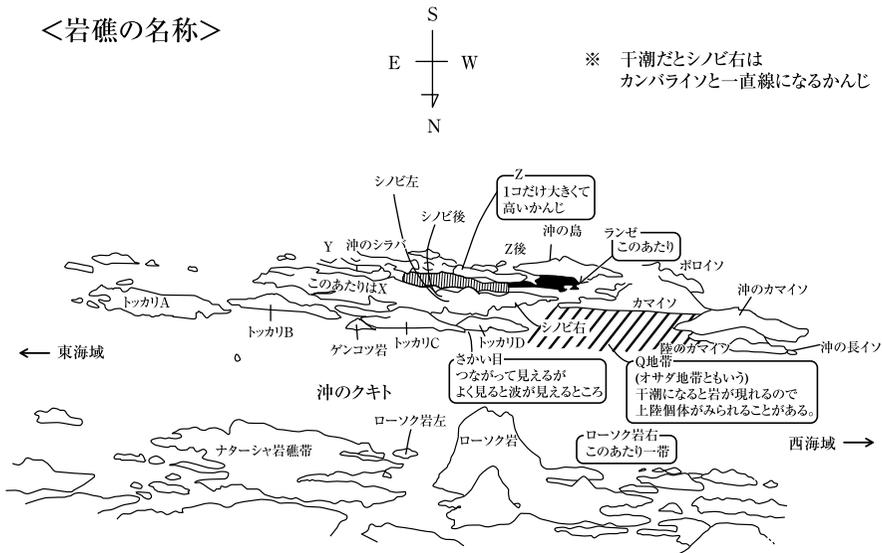


図3 ゼニ研のセンサス調査使用図
 出典：ゼニガタアザラシ研究グループ (2008: 19)

ソク岩といった岩の名をいくつか挙げ、微小地名については、「ゼニ研が知っている」と述べた。

ここでいう「ゼニ研」は、具体的には学生時代から襟裳岬に通い、ついにはえりも町の町民になった人びとを指していた。図3はゼニ研がセンサス調査に用いる資料である。襟裳岬から写した写真をつなぎあわせてトレースした図に、地元の漁師たちとの交流のなかで学んだ微小地名を記載して作成されている。センサス調査のなかに、漁師たちのローカルな知恵が取り込まれているのである。

ゼニガタアザラシとの共生を模索する漁師の Seascape は、野生生物の生息数調査の Seascape に重なっている。ゼニ研時代から地元の漁師たちとの交流を重ね、えりも町に根づき、「えりもシールクラブ」を結成した過程が、図3に象徴されるのである。

5. 微小地名の新たな機能と役割

本論文は、沖縄県平安座島での漁民および北海道えりも町の漁師の Seascape を、海の微小地名から論じてきた。

海に依拠して生きる人びとの微小地名に含まれる多くの情報は、人びとの環境世界や資源利用の社会性を示すものである。平安座島の事例でみたように、漁業主体だった地域の生業構造が変化し、漁民の活動が内海から離れていく時期に、記録され保存された微小地名は、ある時代、ある社会の Seascape を想起するための手がかりになる。

他方で、えりも町の事例からは、漁師の伝統的な生態学的知識とゼニ研の科学的な生態学的知識とを重ねつつ、獣害被害をもたらすゼニガタアザラシとの共生を考えるための、新たな Seascape の基盤が微小地名であることが示された。

自然環境の問題が「開発か保護か」、「生活か自然か」といった二項対立で語られる時期は過ぎつつある。自然環境保全や自然との共生を、科学的な生態学的知識のみならず、当該社会のローカルな知や日常の実践（田辺・松田編 2002）を重視して構想しようという時代に、襟裳岬の岩礁地帯の微小地名は、ローカルな知を越える新しい機能と役割を持つものとして注目できるだろう。

追記：本稿は科研費基盤研究（C）「自然環境を媒介とした共同性構築過程に関する研究——人と自然の関係誌を読み解く——」（代表・関礼子；平成 19 年度～22 年度）の成果の一部でもある。

注

- 1) 北海道では 2001 年にアイヌ語地名が「北海道遺産」に選定され、河川などのアイヌ語地名表記が進められてきた。旭川市では、旭川市アイヌ文化振興基本計画のなかでアイヌ語地名表記推進が位置づけられた（旭川市生涯学習部生涯学習課文化振興係 2003）。
- 2) 1975 年の「入浜権宣言」は、「古来、海は万人のものであり、海辺に出て散策し、景観を楽しみ、魚を釣り、泳ぎ、あるいは汐を汲み、流木を集め、貝を掘り、のりを摘むなど生活の糧を得ることは、地域住民の保有する法以前の権利であった」と記し、地域住民の行為のなかに権利性をみている。
- 3) 玉野井は、「『地先の海』を『コモンズとしての海』としてとらえるべきだと思う。これは、海に沿ってでき上がった村にとっての共同利用の場である」と述べる（1995: 6）。
- 4) ウチナーヤマトグチで「漁民」というので、以下、漁民と記す。
- 5) 金武川（1985: 342）に補足調査したのが、奥田良（1990: 468–471）に収録された「与勝海域の地名」である。関（2004: 136）は個人が把握する微小地名という点に着目し、金武川氏本人より聞き取った微小地名を加えて再度図を作成した。微小地名の意味の詳細については（関 2004: 137–143）を参照のこと。
- 6) この経緯については、関（2002; 2004）を参照のこと。
- 7) 本論文もまた、当然、この凍結保存に「荷担」している。
- 8) 経済的には家計への貢献度は小さいが、自然のなかに分け入って行われる、季節限定的な活動のこと。詳細は、松井（1998）を参照のこと。
- 9) 鬼頭（1996）の「よそ者」は多義的な意味を持ち、そこに属さない者、他所からやってきてそこに属している者、そこに属していたが他所に出て新たな視点（「よそ者」の視点）を獲得して戻ってきた場合などを意味する。ここでの「よそ者」は、「今日来て明日去っていく人」という意味ではない。むしろ今日来て明日とどまる人」（ジンメル 1999=1908: 248）という意味が強い。
- 10) 襟裳岬は岬を示し、えりも岬は集落を示すものとして表記する。
- 11) 以下、緑化事業とアザラシの問題については、関（2000）も参照のこと。

- 12) 2008年8月3日, 小金昭一氏からの聞き取りによる。
- 13) 既述のように, 沖縄県平安座ではウチナーヤマトグチで「漁民」(方名はウミアッチャー)と自己定義するが, 北海道えりも町では自らを「漁師」というので, あえて用語を統一せず, 以下, 「漁師」と呼ぶ。
- 14) 昆布は厳しく7等級に区分されており, 等級によって値段が大きく異なる。
- 15) えりも漁業協同組合は直接に販売店舗を持たず, HPでの直販のみを事業として行っている (<http://www.jf-erimo.or.jp/shop/shop.html>)。
- 16) 既に明治20年頃から, 「将来必ず用材薪炭の不足を生じ…重要な海産を発達せしむる能はざるに至りなば将来の不覚, 如何にしても植林愛林の思想を起こさしむるの急務」として, 明治20年頃に植林が試みられていた(渡辺編1971: 874)。
- 17) 襟裳岬でのゼニガタアザラシのセンサス調査は, 他の生息地での調査とは異なり, 個体に近づいての調査が困難で, 実際に調査を行う大学生たちには魅力に欠けるところもあったという。
- 18) 2008年8月2日, えりもシールクラブ石川昭会長からの聞き取りによる。
- 19) 2008年8月2日, えりも漁業協同組合の越後啓之氏からの聞き取りによる。
- 20) 1月から3月はフノリ, その後にマツボ, ギンナンソウと採取して, 5月終わりから10~11月初旬が昆布の時期である。近年, 海草類の採集量は少なくなっており, ほとんどは自家消費用だという。

文 献

旭川市生涯学習部生涯学習課文化振興係

2003 『旭川市アイヌ文化振興基本計画』。

えりも岬国有林緑化事業40周年記念'92緑と魚のフェスティバル実行委員会

1992 『夢は砂漠化しない—えりも岬国有林緑化事業40年の歴史』。

えりも昔語りを記録する会

2007 『えりも昔語り記録集 潮風とともに』えりも町教育委員会。

大村敬一

2003 「近代科学に抗する科学—イヌイトの伝統的な生態学的知識にみる差異の構築と再生産」『社会人類学年報』23: 27-58。

奥田良寛春

1990 「与勝海域の地名」谷川健一編『渚の民俗誌』(日本民俗文化資料集成5) pp. 468-471, 東京: 三一書房。

金武川清吉

1985 「平安座近海干瀬岩嶼図」平安座自治会編『故きを温ねて』p. 342。

鬼頭秀一

1996 『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』東京: 筑摩書房。

ジンメル, G., 北川東子編訳・鈴木直訳

1999 (1908) 「よそ者についての補論」『ジンメル・コレクション』pp. 247-259, 東京: 筑摩書房。

関 礼子

2000 「共生を模索する環境ボランティア—襟裳岬の自然に生きる地域住民」鳥越皓之編『環

- 境ボランティア・NPOの社会学』（シリーズ環境社会学1）pp.106-116, 東京：新曜社。
- 2002 「地域開発にともなう『物語』の生成と『不安』のコミュニケーション——海中道路と石油基地の島・平安座から」松井健編『開発と環境の文化学——沖縄地域社会変動の諸契機』pp.223-283, 沖縄：榕樹書林。
- 2004 「開発の海に集散する人びと——平安座における漁業の位相とマイナー・サブシステムの展開」松井健編『沖縄列島——シマの自然と伝統のゆくえ』（島の生活世界と開発3）pp.127-166, 東京：東京大学出版会。
- ゼニガタアザラシ研究グループ
- 2008 「2008 繁殖期センサス」（資料）。
- 田辺繁治・松田素二編
- 2002 『日常の実線のエスノグラフィー——語り, コミュニティ, アイデンティティ』京都：世界思想社。
- 谷川健一
- 1988 『地名と風土』（谷川健一著作集9）東京：三一書房。
- 1997 『日本の地名』東京：岩波書店。
- 玉野井芳郎
- 1995 「コモンズとしての海」中村尚司・鶴見良行編『コモンズの力——交流の道, 共有の力』pp.1-10, 東京：学陽書房。
- 松井 健
- 1998 「マイナー・サブシステムの世界——民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『民俗の技術』（現代民俗学の視点1）pp.247-268, 東京：朝倉書店。
- 松本博之
- 2003a 「先住民の海洋資源利用と国民国家の管理——オーストラリア・トレス海峡諸島民のジュゴン豚を事例として」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）pp.299-343, 大阪：国立民族学博物館。
- 2003b 「オーストラリア・トレス海峡諸島における先住民の Seascape」『奈良女子大学文学部研究年報』47: 99-117。
- 柳田國男
- 1998 (1936) 「地名の研究」『柳田國男全集20』pp.7-290, 東京：筑摩書房。
- 渡辺 茂編
- 1971 『えりも町史』えりも町。